

先ほど、指で知った弱点を突いてやる。何度も、何度も。声はどこまでも甘く、その鳴き声もそそった。口ではなんと言おうと、響くのは嬌声でしかない。苦痛もあるのだから、快楽がそれを上回っているのは明白だった。顔を見れば、愉楽で染まり、蕩けそうなそれだ。流す涙も艶めいている。

「あん、……あ、あつ」

最奥部分を味わった後に、浅く抜き差しを繰り返してやる。締め付けられ、また彼が精を放つ。もはや静雄は帝人の性器に触れてやってもいい。それなのに。

他人の肌を知るのは初めての癖に、ひどく淫猥な身体をしている。そんな身体をしているのだから、貪り尽くされるのはもはや当然で必然だ。

「や、奥……っ、出さ、出さないで、……っ」

静雄の終わりを悟ったのだろう。何度目かの懇願を、叶えてやる気は毛頭なかった。

「……っ」

彼の望みとは間逆に、奥深い部分にたつぷりと注いでやった。

征服し、陵辱した愉悦と達成感と満足感。彼を手に入れた、と真実思えた。それは強奪だと理解していたが、構わない。

欲しかった。だから手に入れた。そしてまだ、足りない。もっと欲しい。

もう一度、彼の唇を食った。

もはや帝人は抵抗を示すことすらない。それだけの気力がないのか、体力がないのか。

まだ、熱は体中に燦っている。未だ静雄の分身は帝人の身体に埋めた状態のまま、もう一度形を成していく。それが帝人にも如実に伝わったらしい。

「や、……なん、で……っ」

もしかしたら、帝人は一度だけで終わったと思っていたのかもしれない。

たった一度抱いただけで満足などできるはずがないというのに。自分にそんな謙虚さはない。

「もう、無理、駄目です、無理……っ」

「大丈夫だろ」

保障も確証もない。それでも静雄は大丈夫だと断言する。人間の身体は驚くほど脆くもあるが頑丈でもある。静雄に帝人を壊す気はない。ただ貪り尽くしたいだけだ。だから、大丈夫。

それは理論ですらなかったが、静雄の中では正論だった。彼を蹂躪し、征服し、思うがまま手に入れる。望むこと、考えられることはそれだけだった。

「やだ、あ……っ」

否定の言葉も、今はただ静雄を煽るだけだ。帝人の言動はすべて、誘惑でしかない。

こんな身体を、声を、反応をするのが悪い。こんなにも静雄を飢えさせ、欲しがらせるのが悪い。自分は際限なく欲しがってしまう。